

一・東雲篩雪

昭和45年4月、当時私は日本の高度成長を担う勤続10年目の中堅企業戦士として兵庫県高砂市で昼夜を分かたず懸命に働いていた。本社で会議があつて上京した折りに東京三越本店で浦上玉堂名作展が開催されていることを知り休日に会場へ足を運んだ。

玉堂の代表作の一つとして古くから紹介されており、一度や二度は美術全集などでその写真判を見たことのある「東雲篩雪」の前へ立つた時、暫くその場から動くことが出来なかつた。

「なんと暗鬱で閉塞感の漂うやりきれない気分の絵であろうか。だが何故かとても魅きつけられる」というのがその時強烈に受けた印象であつた。写真判でみたときも暗い感じのする雪景色だなと思つて見てはいたが、心にしみとおるといふ程の感じではなかつた。ところがどうだ。今実物を見てみると小さく描かれた粗末な茅屋の中の読書する高士が「どうだい、雲も凍つたように動かなくなつてきたよ。重く垂れ込めた空から粉雪が音もなく降りしきつていて、やがて木々も溪谷も埋めつくしていくだろう。そんな閉ざされた寂莫の山中で、孤り自然と同化し且つ対峙している私の心境が理解できるかい」と呼びかけているように見えたのである。

目録の年譜を見てみると備中鴨方藩を50才の時脱藩し、春琴、秋琴という二人の息子を連れて諸国を放浪。この絵が描かれたのは60才後半頃と考えられるとあつた。士農工商の身分制度が確立されてあらゆる自由が束縛されていた江戸時代の封建社会にあつて士分を捨てて、敢えて琴と絵の世界へ飛び出していった心境はどんなものだったのだろうとその厳しい決断に思いを致すと、この絵に仮託されて滲みでている玉堂の、雪路を行き悩む煩悶と憂愁が理解できそうだと思つたものである。

更にこの絵に纏わる次のようなエピソードがあるのを知つた。

この絵はもとは近江長浜の柴田家が所蔵していたのであるが、第二次世界大戦終了後の混乱期に財産税で難儀をした同家が手放したのである。そうとは知らない作家の川端康成はこの絵に魅せられていたので是非譲つて貰おうと本能寺にある玉堂の墓へ詣でた後に柴田家を訪問した。しかし、時既に遅く柴田家では手放した後だったので手にいれることができなかった。その後、この絵は当時買い手がつかないままに、愛好家や画商の間を転々としたらしい。買い手がつかないのは「この絵をかけていると気が滅入る」というのがその理由のようであつた。

ところが暫くして、たまたま広島市の原爆の被災地の視察に赴いた川端康成が帰りに京都に立ち寄つたところ、さる画商がこの絵を持つていることを知つた。早速見せて貰つてますます気に入りに値段にかまわず所望した。大金の持ち合わせがなかつたので大阪へ行き、朝日新聞社に借金を申し込んだ。翌日金を届けて貰つて予て念願のこの絵を自分の物にすることができたという因縁があるのである。価値観が変わつてしまひ執筆する意欲も失せて閉塞感に苛まれていた川端康成の当時の心境にフィットするものをこの絵は持つていたのであるうか。

今、私は企業戦士としての戦いを終え、時間にも仕事にも拘束されない自由の身になつて、旅をしたり読書したりと気儘に過ごしているのだが、ある日、図書館で美術全集を繙いていて「東雲篩雪」に再会したのである。繙いた美術全集には佐々木丞平

氏の次のような解説が載っていた。

「渴筆で樹の幹の輪郭線が描かれる。幹から幾つにも分かれ出た小さな枝は縮れたように短く冬枯れの風雪の厳しさを思わせる。樹木の陰に更に一層淡く梢や枝が見え隠れする。いかにも繊細な筆の運びを見せている。このかすかな筆の運びが、雪と寒さの含まれた透明でかつ震えるような大気の厳しさを見事に描きだしている。また、藍を含んだ墨色が山の背後の暗澹たる空間を表現し、その冷気が山膚にまでしみ通るようでもある。山の中腹では不安定に立ち上がった塔やおしひしがれそうな茅屋が見る者に一層心の緊張を強いる。またその周辺に色鮮やかな朱が散りばめられ、冷徹な大気を更にひきしめている。近景の岩間に架かる板橋上には傘をさした一人物が今まさに岩蔭に隠れようとし、岩山の後方の茅屋内では高士の読書する姿が円窓を通して見える。この冬枯れの凍てつくような自然は玉堂自身の心象風景でもあつたるうし、散らつく雪の中で橋を渡り終えようとする人間、窓が開け放たれ、冷気を全身に受けて読書する人間に、自らの姿を投影させていたのかも知れない。五十才にして脱藩し、放浪の中に身を置く玉堂が旅の中で得た自然に対する痛いほどの共感を表現した絵といえよう。70才に近い、最も充実した頃の制作になる玉堂画の代表作である」

東雲篩雪の実物を見たあの日から30年弱の年月が流れ、私の人生にも喜怒哀楽の種々相があつた。この間の経験の功により、玉堂の心境がもつと深く理解できるようになつていくのではないかと思ふようになった。またここ10年続いた平成不況は八方塞がりの重苦しく鬱陶しい気分を社会の隅々に充滿させた。このような閉塞感のある環境に呻吟している今だからこそ玉堂がこの絵に託した気分を理解できるのではないかと思つた。そんなわけだからこれから琴弾の画仙、浦上玉堂がこの絵を書くにいたつた心のうちを追つてみようと思う。

二．池田家との関係

「市三郎、僕はもう長くは生きられないと思うのでこれから話すことは父の遺言だと思つてよく聞くがよい」

と父の浦上兵右衛門宗純が吸呑みの薬草湯を飲んだ後、仰臥のまま寝ればはてた細かい両手を胸の上で組みながら言つた。宗純は胃癌を患つて三月ほど前から病床にあつた。宝暦元年（1757）一月、後の名は浦上玉堂で幼名を市三郎といい、歳は七才、父宗純は六十才で、雪の降る寒い日のことであつた。

「何を仰いますか。精のつく物をたんと召し上がつて養生を続けられればきっと快復なさいますよ」

と病人の枕元に正座していた市三郎は慰め言を口にしながら、心の中では父の死期が旬日に迫つたかと愕然とし、父の話の一言も聞き漏らすまいと畏まつていた。

「いやいや、僕にはお迎えが近くまで来ていることがよく判る。盛者必衰、会者定離はこの世の定めなのだ。決して悲しいとも無念だとも思つていない・・・」

と傍らに座っている妻お茂の方へ視線を移しながら言つた。

「はい。病は気からと申します。気を強くお持ちなさいませ」

と夫の容態を気遣いながらお茂は言つた。このときお茂は47才であつたから市三郎は両親が年とつてからの所謂恥かきつ子であつた。

「市三郎は親の欲目から見ても利発な子だと思ふ。しかしまだ7才でなにしろ幼い。僕が死んだらお茂には苦勞をかけることになるかと思ふがこの子をよろしく頼む。さて、お前達に話しておきたいことが三つある。最初に藩主政言様に対する御奉公のことじゃ。次に浦上家の先祖のことじゃ。最後にこれからのお前達の行く末についてじゃ」

と言つて静かに目を閉じると諭す口調で語り始めた。

「前の藩主池田政倚（まさより）様は私の甥にあたるので、とても可愛がつて頂いて非常に大きな御恩を受けた。御恩返しをしなければと影日向なく忠勤に励んだつもりだが、浅学非才のため殿様の御期待に応えるだけの充分な御恩返しができないままに殿は四年前の元文三年（1747）に亡くなられた。殿は晩年に嫡子の政香様が御幼少だつたので池田由道様の次男政方（まさみち）様を養子として迎えられ、政香様の後見を託された。殿御逝去と共に政方様への家督相続が幕府に認可された。そして現藩主政方様は政務の傍ら政香様の後見をしておられるが、お気の毒なことに病弱であられる。恐れ多いことではあるが万一のことがあれば政香様が家督を譲られることになろう。政香様はお前よりは一才年上で、英邁な方だから優れた藩主になれるであらう。ゆくゆくはお前はこのお方に忠勤を励んで藩の発展を図らねばならぬ」

「父上が前の藩主池田政倚様の叔父にあられるとは存じませんでした」

「前の藩主池田政倚様の実母であらせられる於常の方は儂の父宗明の姉、つまり儂の伯母にあたる方なのじゃ。そなたからは大伯母にあたられる」

「そうでしたか。ちつとも知りませんでした」

「私もこのことはまだ市三郎には話しておりませぬ」

とお茂は弁解するように言った。

「さればこそ、儂の命あるうちに二人の前で言い残しておかねばならぬ」

と言いながら胃の腑が痛むのか顔を顰めた。

「儂の父浦上宗明とその姉の常女の二人の姉弟が筑前黒田藩の庇護を離れて江戸へ上がってきたとき、鴨方支藩の始祖池田政言様は池田光政様の嫡出の次男でまだ部屋住みの身であつたが父君が参勤交代で上府されたときお供されて江戸屋敷で武芸に励まされていたのじゃ。世話する方があつて姉の常女は江戸池田屋敷の奥女中として奉公に

あがつたのだが、生来賢く美貌で性格の良かった常女は政言様に見染められて側室になられたという次第じゃ」

「その縁でお祖父様の宗明様も池田家へご奉公することになったのですね」

「結果としてはそうなつたが、それには時間がかかつた」

「何故ですか」

「藩祖の光政様が英明な藩主で勤儉奨学を旨とし新規の召し抱えは厳禁されたからじや。それには慶安四年（一六五二）の由井正雪の乱も納まつて天下は安泰になり幕府の威光が全国津々浦々まで行き届くようになったということもある」

「尚武より奨学ということですね」

「その通りじゃ。兵乱に備えて浪人を召し抱えるよりは陽明学を奨励し知行合一の実を挙げていくことのほうが大切だと考えられたのじゃ。更に光政様が寛文七年（1667）に日蓮宗不受不施派を厳禁されたこともお召し抱えが遅れた理由の一つじゃ」

「浦上家では不受不施派ではないにしろ、先祖代々日蓮宗であつたから、姻戚関係があるとはいえお祖父様の宗明を例外的に扱うわけにはいかなかつたのじゃ」

「不受不施派とは何ですか」

「不受とは法華宗の寺や僧が他宗からの布施供養を受けないということであり、不施とは信者が他宗の寺や僧に布施供養を捧げないということなのだ。このことを絶対守らなければならぬ教えとしている日蓮宗の一つの宗派のことなのじゃ。この教えをつきつめていくと天下人といえども法華宗を信仰する信者の気持を曲げることはできないということになり、そのところが藩政にとつては具合がわるいのじゃ」

「なるほど。そのことは判りました。では何時から浦上家は召し抱えられたのですか」

「新藩の鴨方藩が出来て寛文12年（1672）に政言様が初代藩主に分封されたときからじゃ」

「お祖父様は改宗されたのですか」

「いや、そうではない。光政様が隠居なさって家督を綱政様に譲られると同時に次男の政言様と三男の輝録様に備中墾田をそれぞれ二万五千石、一万五千石ずつを分与され鴨方支藩、生坂支藩を創設されて表向きの治世には口出しをしなくなられたからじゃ」

「つまり政言様が新藩主として新しくお祖父様の浦上宗明を召し抱えることについては、隠居だから支藩のことにまでは口出しされなかつたので改宗しなくて済んだ」

「そういうことだ」

「それまでお祖父様の暮らし向きはどうだったのですか。難儀をされたことでしょうか」

「浪人の生活は決して楽なものではなかつたと思うよ。町人の子供達を集めて手習いを教えたり傘張りの内職をしたり道場へ通って師範代として稽古をつけたりして暮らしておられたと聞いておる。いずれにしても浦上家は池田家鴨方支藩に仕官できるようになったのだから忠勤に励んで御恩返しをしなければならぬ。お前は若い頃から政香様に御奉公することになると思うが、その時に備えて勉強に励みなされや」

「はい。陽明学を究めたいと考えております」

「それはちよつと差し障りがあるからよく考えたほうがよからう」

「何故ですか」

「それは幕府が朱子学を重視し、藩もそれに倣つたからじゃ」

「されど岡山藩は光政様が熊沢蕃山先生を登用されて以来、治世に実績をあげられ陽

明学の本拠地として学者の往来も多く、藩学としても大いに栄えたではありませんか」

「確かに熊沢蕃山先生が正保二年（1645）に再来されて明暦三年（1657）に致仕されるまでに上げられた実績が大きかつたのは事実だ。しかしそれも光政様の後楯があつたればこそなのじゃ。ところが明暦三年以降、光政様は方針を変えられて次第に陽明学から朱子学に傾斜していかれた。市浦清七郎、三宅可三、林文内、小原善助、中村七左衛門、窪田道和先生等を次々と招かれて藩校の教授陣は全て朱子学者に入れ代わつてしまつた。今では藩学は完全に朱子学になつてしまつた。特に、朱子学者の林信篤が元禄四年（1691）に幕府の大学の頭に任ぜられて以来、陽明学は藩としても幕府に對する手前憚られるようになってゐる。密かに蕃山先生の徳を慕つて陽明学を学んでゐる者は藩内にもまだ沢山残つてゐる。しかしここが肝要なところだ。幕府や藩の御政道に逆らうようなことをするのは謀叛と見做されお前のためにも先々良いことはない。時流を的確に読み取りそれに順応していくことは処世上最も大切なことじゃ。このところはよく思案するがよい」

「はい。よく判りました、よく思案してみたいと思います」

「今日は疲れたのでこれで終わりにしよう。明日は浦上家の祖先のことについて話さねばならぬ」

「と言うと軒をかいて眠りだした。」

三．家系

「儂がもの心ついた八才の時に父宗明は亡くなつたのだけれど、丁度今儂がお前に話しているように病床の枕頭で儂は父から浦上家の系図を渡され、先祖のことを聞かされたのじゃ」

翌日市三郎が母とともに宗純に呼ばれて枕頭へ正座すると一巻きの系図を手渡して

から父の宗純はこう切り出した。

「遠く遡上れば浦上家の始祖は竹内宿弥（たけしうちのすくね）なのじゃ。この方は第八代天皇孝元天皇の皇子、比古布都押之信命（ひこふとおしまことのみこと）と山下影比売（やましたかげひめ）の間に生まれた御子で長寿を全うし、景行天皇から仁徳天皇まで五代の天皇に忠実に仕えられたそうじゃ。この方の末裔に紀貫之がおられる」

「あの三十六歌仙の歌人ですか」

歌の心得のある茂が興味ぶかそうに口を出した。

「そうじゃ。土佐日記の著者としても有名な御仁じゃ」

「それでは学問がよくできるように紀貫之にあやかっつて、市三郎にも紀姓を名乗せてもいいのでしょうか」

「差し障りはなかるう。むしろ紀貫之も前途有為の末裔が出てきたものじゃと喜ばれることだろう」

「この紀貫之から二十二代の裔にあたる七郎兵衛行景が播州浦上庄を領した時、当時、播磨、美作、備前三国の守護であった赤松則祐に仕えたそうだ。赤松則祐は室町幕府でも侍所の所司となり四職家の一つとして重きをなした名門の武家なのじゃ」

「それでは、その頃浦上の姓がうまれたのですね」

「そのとおりじゃ。行景以降代々浦上氏を称して室町時代末の戦国時代に備前和気の天神山城に拠つて備前、美作、播磨三国に武威を奮つた浦上宗景という優れ者が出たのじゃ」

「その後はどうなりました」

「ところが、弱肉強食で下克上の戦国時代の中で、家臣の宇喜多直家が力をつけてき

て、浦上家の家臣の中で筆頭の地位をしめるようになったのじゃ。そのうち、野心家の直家が権謀術策を弄して謀叛を起こし、天正五年（一五七七）には天神山城を攻撃してきたのじゃ。ところが、直家の調略によつて宗景の重臣であった明石飛騨守景親父子、延原弾正忠景、岡本五郎左衛門龍晴らが主家を裏切り直家方についたので数日間の攻防の末あつけなく落城してしまつたのじゃ。宗景様の無念が偲ばれよう」

「宗景様はその後どうされたのですか」

「一旦は播磨へ逃れ何回も再興を画策されたが成功せず、最後は頼つていた黒田官兵衛の転封に従つて筑前へ下つて八十才の天寿を全うされたのじゃ。この宗景様のあと浦上小二郎、浦上備後守宗資と続き、浦上松右衛門宗明が黒田氏の庇護を離れて姉の常女と共に江戸へ上り昨日話した経緯を経て池田藩へ仕えることになった次第なのじゃ。名前に宗がつくのは宗景様の武勇にあやかりたいという意味があるのじゃ」

「紀之貫といい浦上宗景といい歴史に残る先祖を持つていることを誇りに思います」
「お前には於繁、於千代という二人の姉と富太郎という兄があつたが、於千代と富太郎は生まれて間もなく死んでしまつた。長女の於繁はお前も知つておるとおり昨年、二十二才の若さで流行り病に罹つて逝つてしまつた。儂が死んだら後には母上とお前だけになつてしまふ。これも運命だから致し方なかるう。そこで母上の教えをよく守り、体を鍛え勉学に励み、主君に忠義を尽くさねばならぬ。そして名門の浦上家の繁栄を圖つて名を残して貰わねばならぬ」

「お言葉しかと肝に命じます」

「お茂も残るのは市三郎だけになるが幸いこの子は体も丈夫だし利発な子のようにだから、学問に励ませ政香様のお役に立つ人物に育てて欲しい。後をよろしく頼む。儂らの若かつた頃は武芸第一じゃつたが、時代が変わりこれからは学問で身をたてる世に

なると思うからくれぐれもそのことだけは心して励んで貰いたい。儂がお前達に最後に言いたかったのはこのことじゃ」

四・藩主政香と水魚の交わり

浦上玉堂は延享二年（1747）、前述のように父浦上兵右衛門宗純が54才で母茂が40才のときの第四子として岡山市石関町天神山の鴨方藩邸で生まれた。父は鴨方藩主池田政倚に仕える家臣であり、母は三百五十石取りの岡山藩士水野七郎左衛門の娘茂であった。幼名市三郎のち磯之進を名乗った。鴨方藩は独自の支配統治機構は持たず屋敷を岡山に置いており、備前鴨方には領地だけがあった。

宝暦元年二月五日、父宗純は60才で岡山市内の鴨方藩邸宅で静かに黄泉の国へ旅立った。あとには市三郎と母親茂の二人だけが残された。市三郎は七才であった。家族としては母子二人だけの寂しい野辺の送りを済ませると市三郎は家督相続を藩に申請し三月に許可された。と同時に初代藩主池田政言の側室お常の方が市三郎の大伯母にあたるという特殊な姻戚関係が配慮されて御広間詰めを仰せつかった。

市三郎は出仕すると公務が執り行われる表御用部屋の片隅に控えて、なにかれとなく雑務を言いつけられては走り廻っていた。名前を呼ばれたときには大きな声で返事をし、目を輝かせて命令を受け復唱してから、きびきびした物腰で走り去る小さな後ろ姿には気品さえ感じられた。言いつけられたことは直ちに実行し、例え小さなことであってもその結果を必ず快活な口調で報告する態度は礼儀にかなっており、並みいる大人達をしばしば感心させていた。その立ち居振る舞いには賢い母親の躰けが偲ばれた。初学者用に編纂された小学という礼儀、修身の書を九才のときに初めて読んだと後日述べているように母の教えを自らも学問的に深めていこうという向学心が旺盛な少年であった。

先ず、学問についてみると、10才のとき藩校への入学が許され学問に励んだ。言わば働きながらの就学であったが、真面目に学業にも勤務にも励んだ優等生であったことが「備陽国学記録」の記述によっても窺い知ることができる。即ち、14才のときには平生行儀のよい学生だけが出席できる夕食会に選抜されているし、15才のときには詩を学んでいる。そして16才のときには既に大生となっている。23才では平生怠りなく授業に出て聴講し勉学に精勤した者として表彰されているのである。

次に、勤務についてみると、宝暦七年（1757）僅か13才の年少であるにもかかわらず、三番町にある吉田権太夫跡の家屋敷を拝領できるほどの働き振りを示している。宝暦十年（1760）16才のときには、藩主政方逝去の跡を三月十日政香が襲封したのであるが、その年七月九日磯之進へこの頃には市三郎から磯之進に名乗りを変えていたと思われる）は新藩主に初のお目見えをした。同年九月二日には前髪を切って元服し翌三日から御広間御番として出仕した。そして九月二十一日には御側詰めを仰せつかつて藩主政香に近侍することになった。このとき磯之進16才であり、政香は17才で主従共に純情多感な青年であった。

年齢が一才しか違わないという親近感もあつたであろうし、真面目に人生に立ち向かつていこうという意気込みがお互いの琴線を刺激しあつたのか二人の間には水魚の交わりの如き関係が発生した。